

全カリの目指すもの ～専門性に立つ教養人を育てるには～

日 時：2002年11月11日（月）18:30～20:30

場 所：本学池袋キャンパス12号館第1・2会議室

〈シンポジスト〉

寺崎 昌男氏

(桜美林大学大学院教授・元本学全カリ運営センター部長)

嶋田 彩司氏

(明治学院大学教養教育センター教授)

〈司会者〉

名和 隆央氏

(本学経済学部助教授、全カリ総合部会長)

I はじめに

名和（司会） 全カリ運営センター主催のシンポジウムをこれから開きます。

全カリは、1997年に発足しまして、今年で5年目を迎えました。

それで、5年経ちまして、これからの方向、あるいは現在のあり方を見直すために、発足当時の運営に携わっていただいた寺崎先生、それから、また、明治学院大学で教養教育センターの教授でいらっしゃる嶋田先生に来ていただきました。こういうかたちのシンポジウムを開くことになりました。

テーマは、全カリのモットーにしている「専門性に立つ教養人」とは何かということ問いながら、これからの全カリのあり方を考えていきたいと思っています。

お二人の紹介に先立ちまして、センター部長の庄司先生にごあいさつの言葉をいただきたいと思います。

庄司 みなさま、きょうはお忙しいところお集まりくださいましてありがとうございます。また今日は特別に、私どものために時間を割いてくださりお話しただけのお二方の先生、本当にありがとうございます。よろしく願いいたします。

現在、私は、全カリ運営センターの部長をお引き受けしておりますが、みなさまご承知のように、全カリ運営センターは、発足当初、寺崎先生を部長として、本当に全学の教職員の協力のもとで、ここまで成長する礎を作っていたのだと、受け止めております。改めまして、ここにおいでになるみなさま方の、日ごろの全カリに対するご

協力、厚くお礼申しあげたいと思います。

全カリといえば、立教大学の中では、関わりあうと大変なことになる忙しいセクションといわれていますが、関わっているそれぞれにとりましては、思いもかけず一生懸命になってしまうとか、一生懸命にならざるを得ないようなものをたくさん含んでおります。そして、外から見ればある程度のところまできたかに見えて、実は本当に微妙なバランスのもとで、ぎりぎりの運営をしながら、しかしそれなりに着実に前進を遂げているというところ です。

この今日のテーマとされている「専門性ある教養人」というなかなか奥深い言葉も、私どもは寺崎先生が非常に強調しておられた言葉だと伺っております。全カリには、そういういろいろなキーコンセプトやキーワードが次々と生まれており、特に私たちは、「進化する全カリ」と呼びながらがんばっているわけです。

毎年シンポジウムはやっておりますが、特にこの2年間ほどは、学生の反応を大事にしたいということで、学生を主役にするかたちでの企画をやってまいりました。それはそれで成果があり、たいへん率直な手厳しい学生の意見を受け止めまして、私たちもそのつど、努力しなければいけないたくさんの課題があることを確認させていただきました。

ただ、やはり学生の声を二回ほど聴きながら、いま私たちが抱えるに至ったものをこういう場ではっきりさせていきたい。特に、寺崎先生が考えられた、当初目指していた全カリが、いま先生からご覧になるとどういう段階にまできているといえるのかということも率直に伺いたいと思いますし、それから、他の大学の実践に学ぶ機会は少ないものですから、今日、明治学院大学から嶋田先生においでいただいたということは、私たちにとってはこの上ない貴重な機会だと思い、たいへん楽しみにしておりました。

今日、お二方は、みなさまからいろいろな質問が出たら、どちらが答えるか心配されているようですが、たぶん答えが一つというようにはなりませんので、ぜひとも自由な意見交換の場にしていただけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

Ⅱ シンポジスト発題

名和 庄司先生ありがとうございます。

続きまして、寺崎先生と嶋田先生を簡単にご紹介します。

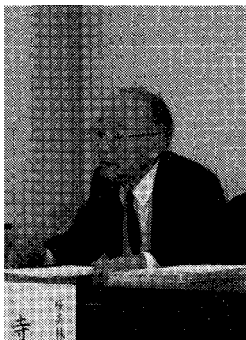
寺崎先生は本学全カリ運営センター部長を務められて、現在は桜美林大学大学院教授でいらっしゃいます。教育史がご専門と聞いておりますが、立教の教養教育改革のそもそもの理念、あるいは全カリのキーワードである「専

門性に立つ教養人」は何を意味していたのか、全カ리를立ち上げるにあたっての課題は何か、今後の全カ리의展望について、いろいろお話をさせていただきたいと思っています。

それから、嶋田先生は、現在明治学院大学教養教育センターの教授でいらっしゃいます。明治学院大学は、立教大学とは教養教育の運営については違ったシステムになっているそうなので、明治学院大学のシステムのご紹介と、明治学院大学のシステムから見た立教大学の全カ리의あり方のよい点、悪い点をご指摘していただいて、われわれのこれから全カ리를考える上での問題点を教えていただきたいと思いますと思っています。

全体の予定を申しますと、寺崎先生に40分ぐらいのご報告、嶋田先生に30分ぐらいのご報告をいただく。それからフロアのみなさんも含め、全体の質疑応答、討論を行っていきたいと思います。

それでは寺崎先生、お願いします。



寺崎 昌男氏

寺崎 ご紹介いただいた寺崎でございます。

今日は、思い出話をするというつもりではございません。むしろあの当時、私はどういうことに気がついていたか、どういうことに直面していたか、何を問題としたか、こういうことについての話を聞いていただきたいと思っております。

一般教育部「解散」までのこと

全学共通カリキュラムそのものは1997年4月から全面実施に至ったわけですが、全カリセンターというのが発足したのは、その2年前でした。1994年の12月から部屋ができたということになります。1995年春に本格的に運営委員会ができ、それから1996年度まで2年間準備をして、そして1997年を迎えたわけです。

つまり、私どもがその衝に当たるようになってからでも2年半経ったわけです。その前にさらに3年間、3種のパンフレットを出した準備作業がありましたから、合計すると5年半、全カリについてああでもない、こうでもない議論をしてきたということになります。ですから、カリキュラム改革の準備としては、いまから思えば気の長いやり方だったと存じます。ただ、その準備は決して全体としてむだではなかったと思います。

1994年の12月にセンターができ、いきなり私が、立教大学全学共通カリ

キュラム運営センター部長という、やっと一息で言えるぐらいの長い肩書きをもらったわけですが、何をしていたかよくわからないのです。そのとき、私の気持ちの中には、当時あった一般教育部の先生方に悪いなという思いが非常に強うございました。二番目に専門学部の先生方の了解をどうやってとっていったら、これからこの恐ろしい組織が動いていくだろうか。この2つの思いにとらえられていました。

当時の私は、東大などの様子を見ておきまして、教養学部がいったんできたあとで一番「抵抗勢力」になるのは専門学部だと思い込んでおりました。専門学部はたとえば一般教育の連中は何をしているか、もう少しきちんと語学をやってくれ、もう少し入門教育をやってくれ、駒場の教養学部でさんざんだめになってから本郷に来るようじゃだめだと、これが絶えざる批判だったんですね。私の頭にはそれがありましたので、専門学部の先生方の協力こそ大事だと、当時の意識としては、そちらのほうがむしろ強かったのです。

しかし、現実にはセンター部長というのになってみますと、何が一番心理的にきつかったかという、やはり一般教育部の先生方のお気持ちの方でした。一般教育部の先生方は、何せそれまで、とにかく6,000人の学生を対象に面倒を見てこられた。その先生方がいったいどういうお気持ちで全カリの発足を見ておられるか、これは私にと

って、なかなか複雑な思いでございました。

やがて、センター長就任の5ヶ月後、1995年の4月からあの一般教育部は解散され、そしてその後、私たちが学生とカリキュラムをいったん引き受けて、2年間運営していかねばならない。その間に新カリキュラムを作って全カリを発足させる。こういう流れになっていましたから、新カリキュラムを作っていくことと、従来のものを引き受けて、その残りをやっていくことという2つの負担がかぶさってきたわけでございます。

具体的に申しますと、私、センター部長は、その次から行われるいわゆる一般教育の試験の全部の最高責任者ということになりました。よく存じあげない一般教育の先生方ががんばって運営されている試験の、最終責任者ということになりました。もちろん私一人で担っていたわけではなくて、全カリの運営委員の先生も、その他の先生方も次々にお仕事は分担して下さったんですが、そういうような全く考えてなかった負担、これが起きてまいりました。そういう複雑な思いをこちらもしながら、しかし当時の一般教育部の先生方はもっと複雑な思いだったと思います。

あとで知りましたが、1955年の確か10月付けで、一般教育部の第1回の教授会の記録というのが残っているようであります。朝比奈誼先生という大学

教育研究部となった旧一般教育部長の先生が教えてくださいました。1955年10月の一般教育課程の独立とは、私学の中ではものすごく例外的に早い部類に属します。国立はともかく、私学の場合は、戦後改革のときに、昔の大学予科の先生方はほとんど全部が各学部に分属されました。いま、慶應義塾も早稲田も同じことですね。しかし、立教だけは一般教育部が1955年からきちんと発足し、そこは非常に高い知的エネルギーをお持ちであるということ、学外の私も存じておりました。高名な先生方、あるいはいいお仕事をなさっている先生方がたくさんおられる、がんばっておられる。またご自分たちで次々に自由科目も作っていかれている。立教の中で非常に大きい仕事をなさっているということも知っていました。それを解散するという方向は、全カリが発足するずっと前から決まっていたのですが、解散のあとどうなるかについては決まっていませんでした。やっとなどもが全カリを作っている傍らで、1995年3月で解散という具体的な日程が決まったと記憶しております。そういう流れの中で、先ほどの二つの仕事を引き受けざるを得ないということになったわけです。

結果においてはどうだったか。立教の場合は、東大と違って、専門学部の先生方のご理解は、思ったよりずっと早く得られたと私は思いました。これは不思議でした。なぜそうなったかは、

あとから申し上げます。

二番目は、このような葛藤とかとまどいを持ちながら全カリが発足したあとで、私が非常にびっくりしたのは、今日の資料の2枚目にある意見書が出たことです。私にとっては非常なショックでした。1995年の4月に日経連が発表したものです。新聞に載りましたのですね。日経連の本部から本物を取り寄せてもらいました。本当に大きいレポートなんですよ。

第1章の最初をコピーしておいたんですけども、ここで産業界の、特に大企業の代表者たちが言っている注文に先ずおどろきました。「人間性豊かな構想力のある人材が欲しい、独創性、創造性のある人材が欲しい、問題発見、解決能力を有する人材が欲しい、グローバル化に対応できる人材が欲しい、リーダーシップを有する人材が欲しい」、この5つが挙がっています。なぜ驚いたかということ、これこそ私たち教育学者が、戦後言ってきたことだからです。他方、自分の頭で考える子どもを育てましょうとか、世界と仲よくできる子どもを育てましょうとか、どの学校にもそんなことが書いてあります。私たちはこのことをずっと言ってきたんです。ところが、それらは全部裏切られてきた。その果てに、この人たちが言い出したのがまさに子どもの願ってきたことなんです。

例えば、「人間性豊かな構想力のある人材」というところの説明文には、

「政治、経済、社会、科学などあらゆる分野で新政策や新技術などを企画開発し、創造的な成果を生み出していくには、その背景を構造的に把握し、豊かな感性、インスピレーションの中から新しい構想を練り上げていく能力が必要である。このように、物事を人間性重視の立場から、根本的、構造的に把握する能力、すなわち、構想力を養成するためには、歴史、哲学、思想、社会心理等の獲得が、文科系、理科系を問わず重要となってくる」。まるで立花隆みたいなことを言っているわけです。しかも、「インスピレーション」とか、「豊かな感性」とか、こういう言葉を産業界が発したことはありませんでした。

私は、戦後改革から1960年代前半までの戦後大学の歴史をまとめたことがございます。当時までの産業界の要求というのも全部読んできました。その中で彼らが言ってきたことは何かというと、「新制大学は専門学識が低い」ということです。二番目には、むだな教育は避けろということ。むだな教育の代表が一般教育だったわけです。にもかかわらず1990年代の半ばになったいま、手のひらを返したように歴史、哲学、思想、社会心理等が重要だというのは何ごとか。これらはみな一般教育、教養科目ですよ。これを今になって何を言うのか。私は初め頭にきました。しかし暫くたったあと、これは産業界が発したSOSだと私は

思いました。彼らはさんざん偏差値だけを頼りに学生を採ってきた。高度経済成長の間であっても、一刻たりとも偏差値信仰を緩めず、評価してきた。その人たちが今発している、救命信号なのだ。彼らは困ったんですよ。ある種の青年たちを新社員としてじゃんじゃん迎え入れておいて、これはだめだということに気がついたのです。

二番目は外国語です。「生きた英語の他に使える外国語の2カ国語をマスターできる語学教育が期待される。同時に比較文化、文化人類学などの分野を学び、他国の歴史、文化、風俗、習慣、宗教などを理解し、人間性を尊重して対等の立場で話し合いの場につける素養を身につけることが大切であろう」、こういう注文も書いてあります。これは当時、立教の中で外国語教育を変えようと思っていた先生方がおっしゃっていたこととそっくりです。それを産業界が言ってきたのです。

あとで聞きましたら、この意見書には裏話があって、約5年間ぐらい日経連本部の中に「人間塾」と称する指導者たちの会が研究会を続けてきて、その結果がこの意見書になったのだそうです。なんで1995年に、手のひらを返してきたかということ。しかし、気持ちを鎮めて考えますと、これはSOSなんだと。1990年代半ば、バブルがはじけて、もう1980年代半ばのように、世界経済を日本経済が背負っていくなどというような自信はなくな

ってきた。そのときに、若い人のマンパワーのあり方に関して、一番鋭敏な関心を持っている団体が出したSOSだと、こう思って読めばいいと、最後に私は納得しました。これが、ちょうど全カリの運営委員会が正式に発足した1995年の4月に発表された。別の意味で私は力づけられました。やはり教養教育は望まれているわけです。21世紀に向けて人材の中身が変わりつつあるということです。

このあとですよ、大学審議会が全く同じ言葉を使って、課題探求能力が大事だとか、教養教育が重要だとか、自分の知識や人生を社会との関係で位置づけることが大切だとか、自主的、総合的に考え的確に判断する能力をつけるとか、次々に言い出してきているわけです。

その一番新しい流れがこの前中央教育審議会が出しました教養教育のすすめです。小学校から教養教育に励めと言っております。そんなふうはこの流れはずっといまに続いているわけです。客観的には、全カリをつくっているわれわれは大事なことをしているのだ、と当時考えたことは間違いでなかったと思うのです。

何を覚悟し何を見出したか

二番目に覚悟させられたのは、外国語教育のことです。運営委員会が各学部からお二人ずつ出てこられて発足し、総合教育部会長と、言語教育部会

長がそれぞれ活動を開始され、そのまわりに専門委員が付かれ、かつ研究室ができるというように1995年の半ばぐらいにだんだん整ってまいりました。そのころにわかったのは、やっぱり一般教育改革のきっかけはどうやら外国語教育のほう、それも英語から出たらしいということでした。これは、さすがに鈍い私にもよくわかりました。英語の中で英語教育を革新しなければならないとお考えになっている何人かの先生がおられて、この先生方が、一般教育部体制では、なかなか教育改革ができないと思ってこられた。あれがどうやらこの革命の最初のクーデターだったんだな、われわれはそれに乗っているんだ、と思い始めました。

しかし、これはやはり大事な点だと思いました。静かに考えてみると、大学に入ってから学生たちが取る124プラスアルファという単位の5分の1ぐらいが、語学に割かれているわけですね。それだけの時間と労力を大学は学生たちに要求してきた。けれども、それにふさわしい教育をしてきたかと言われたら、そうではないと言わざるをえないものがあるだろうと思います。先ほど申しましたように、戦後大学史をずっと顧みてきた者の目からみると、一般教育の中の自然、人文、社会というところの教育をどうしたらよいかということについては、ずいぶんたくさん議論が出ております。実践もあります。それから、立教がいま作っ

ておられるような総合教育科目は、もう1956年ぐらいからお茶の水女子大で初めて始まっているんですね。そういう長い歴史があるけれども、こと語学教育に関して言えば、これはもう本当に理論的な蓄積も実践の積み上げもほとんど寥々たるものだったといえます。そのまま紛争を経、それから紛争後の安定期を経、またカリキュラム改革を経た中で続いてきたと思うんですね。それがいま問われている。私にとっては改めて気づかされたことでした。

次に気づかされた点は、学部課程の教育目標を転換しなくちゃいけないという問題でした。先ほどからお話に出ております「専門性に立つ新しい教養人」をつくる、この目標を立てましょうと私が申したことに始まりました。1995年の4月、最初に全学部から正規の運営委員が全部集まられて、合計10人、大学教育研究部からお一人、それから私、総合部会長と言語部会長がおられて、あと専門委員もいらっしゃる、最初の会の際でした。

日経連の要望書を読む前だったんですが、「学部の先生方のサポートを得るためには、専門教育のほかにもう一つミッションがあるということをおわかっていただかないとだめではないか」と思ったんです。というのも、先ほど申したように、戦後ずっと財界にしても学生諸君にしても、官庁にしても、学生たちの親にしても、ましてや大学

教授の場合は特にそうですが、「学部教育の目標は専門人をつくることだ」と思ってきたのではないのでしょうか。当然のことで、1946年から1947年ぐらいまでは、日本に旧制大学しかなかったわけですね。旧制大学は全部学部できておりました。一般教育は、大学予科と旧制高校でやっていた。つまり大学からするとよそごとでよかったのです。それがそのまま新制大学の教育目標に移行しました。大学の仕上がり基準はやはり専門の学識ではないか。こうみなさんが思ったのは無理なかったと思います。ただし、一般教育というものが入ってきた、語学も入ってきたし、保健体育も入ってきた。この点だけが戦前と違う。それを考慮しても、「教養ある専門人」をつくる、これが新しい大学の目標だと暗黙のうちに思ったとして不思議ではないと思います。そういう暗黙知の中で、戦後の日本の大学教育は進行してきました。

ところが、学部をあげて、立教が考えたようなリベラル・アーツの教育の強化に力を注ぐためには、同じ目標を掲げていたのではだめではないかと思いました。もちろん、専門学識は大事だと思います。なぜなら、日本の大学はアメリカのリベラル・アーツカレッジ・プラス・グラデュエイトスクールとは違って、学部段階まで専門学部という大きい杭が打たれています。その中で専門を学ばないと言っておかし

いことになる。

ところが、今後はそれだけではたぶん済まない。むしろ「学部の卒業目標は、専門人をつくることではなく、そのためのベースを持った人をつくることだ、それは教養人と言っていいのではないか。そのかわり専門学識における専門性も持つのだということに、まず腹をくくらなくてはこの仕事に立ち向かえないだろう」、これが一つ考慮した点でした。

二番目に、50年前と違って、これからは大学院が増える。そうすると、「教養ある専門人の育成」というのは、まさに大学院に譲っていい仕事で、これは大学院の使命なんだと思分けをしてみたらどうだろうかと考えました。幸いこの言葉は、私が案出したコピーにしては珍しく普及して、その後たくさんの方のポスターにお使いいただきましたね。気恥ずかしい思いですが、間違っていないかと、いまでも思います。

三番目の柱に移ります。振り返ってみますと、あの当時、「新しい教養人をつくるということを頭に置きましょう」と言って、運営委員会の先生方も総合教育部長の先生方も、かなり新しいかたちの一般教育をつくりたいと本当に思っておられたと思います。また、専門学部にもいろいろ分属された旧三分野の先生方も、非常にそのことには責任感をお持ちでした。では、新しいカリキュラムを、旧三分野にこだわらず

作っていくにはどうしたらよいか。

もう一つは、スポーツ実習です。体育の先生方の中のある部分は非常に心配をしておられました。これまで全員必修というかたちで、ともかく戦後50年間、大学の保健体育の理論と実技が続いてきたわけですが、その全員必修という枠が外れるわけですからね。選択科目になって、学生がだれも志望しなかったらどうなるだろうという気持ちも、おありだったと思います。それからまた、世間で伝えられているところだと、大学からはもう体育はなくなるんだと。私が東大におりました最後のころから、多くの大学の保健体育の先生方はすでにそのことを本気で心配しておられました。私たちは、「一般教育体育だからいけないんだ、そうではなくて、4年間を通して体育をやるというかたちに変えたら続くんだ」ということを、教育学部の中に体育学科がございましたから、その先生方と一緒にそう言って励ましていたんですね。立教大学でも、来てみたら「スポーツ実習」というかたちにどうやってもっていくか、これを保健体育の先生方は非常に苦労されておりました。

さて、総合科目 A・B のカテゴリーや科目名は、いまこうなっていますけれども、作っていったころは、はっきり言いますと、かなり便宜的でした。つまり、旧一般教育の先生方の持っておられたリソースと申しますか、教員数とか科目名称であるとかを実はかな

り受け継ぎました。それから、持って
おられた非常勤講師コマ数といったも
のも、かなり大幅に新しい全カリに
いただいたと思います。旧一般教育の自
然・人文・社会の中の特に人文と社会
の部分はむしろすうっと新しい全カリ
のほうに移ってきたと思います。

それはともかく、総合科目カリキュ
ラムを作りましたときによかったと思
いますのは、たびたび議論をしたこと
です。このカテゴリー、科目名、およ
び科目の並べ方、これの背後には、当
時議論していたことがいまでも生きて
いると思います。

例えば、その当時私たちは何を言っ
ていたか。何せ「専門性に立つ新しい
教養人」をつくるというんですから、
そもそも新しいリベラル・アーツとは
何かという見通しをたてなければなり
ません。

新しいということの意味の中に、4
つぐらいの知的領域があるんじゃない
か。一つは環境だろうと。これはもう
みなさんに異議ありませんでした。二
番目は人権。これもほとんど異議があ
りませんでした。三番目は生命、最後
は宇宙。私たちは、環境、人権、宇宙
というところまで考えましたが、当時
の総長だった塚田理先生とこの話をし
ていましたら、「もう一つ生命がある
のではないですか」と言われて、ああ、
そうですねと言って、それを取り入れ
ました。ですから、この科目表を作っ
てこられる先生方にも、その4つの柱

があるのではないかということをし
ました。それは結構この中に生かして
いただいていると存じます。

これはありがたかった。というのは、
今どの大学も困っておられるのは、こ
ういうような総合科目を作ったはい
いが、結局のところ国立大学だったら昔
教養部がやっていたもの、私立大学だ
ったら昔から一般教育部、ないしは教
養科目担当の先生方がやっておられた
ものを引き継ぐというかたちでしか編
成できないという実態があるからで
す。しかし立教では4つの柱を立てる
ことができました。

この4つの共通点は、私に言わせ
ると、50年前、新制大学ができたころの
日本の知的な階層の人々は気がつかな
かった視点でありました。また、すべ
て70年代から80年代にかけて浮上し
てきたものでした。人権のように非常
に早くからわかっていたものもありま
すが、それだって最初は、啓発的な思
想の一つだったんですね。

二番目は、これらを学んでいくこと
を通じて、行動の規範の基礎というも
のを身につけることができるというこ
とです。環境問題を身につける場合は、
共生という概念と不可分です。むしろ
環境問題に対する追求が共生という新
しい理念を打ち出した面があります。
人権の場合は、少数者の人権とか、あ
るいは女性の人権、子どもの人権とい
った新しい局面をこれほどに開いてき
た思想分野はなかったと言えるでしょ

う。宇宙は、宇宙科学の巨大な進歩に支えられて、知見はこれだけ深まった。しかし、深まりながら最後のところは、ビッグバンを考えるにしても、あるいは宇宙の進化を考えるにしても、宇宙における人間の位置づけは何かということになる。つまり、事柄は限りなくフィロソフィーに近いし、ときにはセオロジー（神学）にすら近いという領域です。

そんなふうの一つひとつ挙げていってみると、これらは生き方の探求に連なる知的領域だという点では共通しており、それゆえにこれこそ実は教養教育の基本だったのではないのでしょうか。

いろんな議論のあげく、こういうような柱を立て、おかげさまで理学部がありましたので、数理とか、あるいは宇宙とか物質というようなものもカテゴリーに挙げることができました。立教に理学部が存在していたというのは、たいへん貴重なことでした。完全に文科系だけでしたら、非常に困るところでした。

何が大事だったか

何を言いたかったかといいますと、結局、教養教育のカリキュラムを考えていく場合に、どうしても原理の確認が必要だということでもあります。大学によっては、「地域」というものを立てられる大学もあるでしょう。それから、沖縄のほうでしたら、「歴史」と

いうものを立てられるところもある。それぞれ結構なんです。そういう柱を立てること自体が大事だと、あのとき思いました。原理なき総合教育はありえない。これが私のあのとき得た教訓でございます。

二番目は、1997年4月の全カリ発足までに私が感じ入ったのは、全カリという組織の持っている凄まじさです。何も知らずにそのお神輿に乗っちゃった私は、あとでだんだんに気がつきました。あの組織を作った方は、相当な知患者ですね。あとで動かしていつてみて、あの組織があったからこそ、全カリが発足したんだということになります。全カリをやるためにあの組織ができたのではなくて、組織があったからこそ全カリができたんだということがよくわかりました。

SPSの原則

私はこのところ、勝手に命名しています。教養教育を支える組織の原則に「SPSの原則」と言ってよいものがあるのではないかと。立教のことを頭に置いて、よくよそでしゃべっていることです。

Sとは何か。Stabilityです。組織としての堅固さです。立教の全カリは堅固でした。学部と並ぶくらい堅固なものでございました。ここにも何人もいらっしゃるんですが、初期のころの運営委員会は、やっていけばいくほど、だんだん学部の教授会のようになりまし

た。そして、一人ひとりが任務を持って動かしていく。教務委員会があったり、あるいは国際交流委員会があったりするような学部の教授会と全く同じ組織になりました。しかも、お互い、悪くすると見も知らぬ相手と一緒に何かをやっていくということはたいへんなことですが、何となくそれがせざるを得ない雰囲気になってきたんですね。なぜなら、1997年4月という一大目標がありますから、それまでになんとかしなくてはいけないということでした。組織の持っているスタビリティは、下まで及んでおりました。運営委員会があって、構想小委員会があって、総合教育部会、言語教育部会があり、その下に研究室がある。初めは絵に描いた餅だと思ってましたら、意外にこれが固い組織だということがわかりました。そのうちだんだん悪口言われて、全カリまかり通るとか言われて、教室の空いたところは全部全カリが取ってしまうとか、時間割のいいところは全カリだと言えばみんな黙ってしまうとかいうことになって、本当にまかり通っていたんだと思います。まさにまかり通れるメカニズムを、この全カリというのは持っておりました。

二番目のPはPrestigeです。いかにも威信が高かった。部長が部長会に出られるということだけでも、いかに立教にとっては大きいことだったか。部長会は全員、予算のことまで審議い

たします。そこの一メンバーとして全く学部長と同じに出る。しかも、学部長の方々と違って、全学部のことが何となく運営委員会を通じて私にわかっているというのは強みでした。しかも、絶対全カリはカリキュラムを発足させなきゃいけないですから、私も初めて部長会に出たわりには、いろんなことを通してもらったと思います。どの学部の先生にも、どうぞよろしくとか言いながら、結局通させてもらいました。

これで一番よかったのは何かといいますと、忘れられないのは、5号館の上を可動機に変えたときです。あれは全カリ発足の2カ月前か3カ月前にわかったんですね。コミュニケーションなんて言うておいて、行ってみたら教室の机は全部前向きで、固定机、椅子も机も固定。これでコミュニケーションができますかと、事務局の方から言われたんですよ。私どもはそんなことは全然気がつきませんでした。いまでも忘れられない、1月の部長会ですよ。突然、事務のほうで用意した可動機のサンプルが運びこまれてまいりました。1脚4,000円でしたか、高かったんです。これでやろうということになった。あとで聞いてみたら、全国の大学がだいたい教室の机を固定机にする傾向があったんだそうですね。紛争のころ、机が動くバリケードになってしまうので、みんな固定してしまったのですが、立教も固定だった。それを特注で

作り、ともかく4月までに全部できたわけです。それで固定机を全部取り外して、床板を全部変えて、ついでに黒板もきれいにして、4月を迎えるという作業が、3カ月弱でできあがりしました。これで25教室ぐらい、可動機の教室ができたわけです。それでやっと、コミュニカティブという授業ができるんですね。

何が言いたかったかといいますと、そういうときに、センター部長が部長会に出てるとするのは大事なことだという点です。予算案を急に変わってもらわなきゃいけませんからね。センターからだれも出ていなかったら終わりです。prestigeがあることは役に立ちます。いま国立やなんかで失敗しておられるのは、組織のprestigeが低いからです。私は必ず聞きます。例えば、何々大学共通教育機構があると、「機構長の先生は評議会に出ますか」と。たいてい出られていないですね。最高意思決定機関への出席権がありません。「学部長会議に出られますか」「いやありません」。このごろやっとわかってきて、名古屋大学とか東北大学とか、ああいうところは、教養部を解散したけれどもそのあとにできた共通教育の長を副学長が兼ねるということになって、やっとカバーしてもらえるようになった。というのも、一番大事なモノとカネという、このものすごく大事な部分に部長が関与できなかったらだめなんです。カリキュラム

改革はただでできると思っている大学が多いですけど、全然違う。先生方の負担をちょっと増してもらえばいいだろうぐらいのことではだめなんです。やはりいまの椅子と同じで、カネも人もかかる。特にカネがかかるというのを覚悟しないとイケないと思いました。これもあの日学んだことの一つです。

最後のSはSupportです。これは、運営委員会が強い強力で動いてくださったので、ずいぶん楽でした。つまり、私が学部とのあいだの板ばさみになるということは避けられました。というのは、全カリの中の最高意思決定機関である運営委員会で片付ければよいということだったからです。そこで委員の方々と話し合っただけで片付ける。その結果を部長会で持ち出せば、学部長の先生方も運営委員を通じて一応全部聞いておられるから、納得できる。これは学部長と大いに違う部分であります。学部長は、部長会のような最高意思決定機関に出られると、その場と学部教授会との板ばさみになられることが多いようですが、全カリ部長はほとんどありませんでした。いけいけドンドンでがんばって、病気にしないようにしていればよいということが、あこのころの私の心がけでございました。

中でも、全学からのサポートを得られたというのが大きかったです。特に私がこれを感じましたのは、カリキュラム表の中の総合B群です。総合B

群を作ったときに、なんせそれまでの東大での経験がありましたから、各学部から出てくださってこういう科目を作るのがどれほどおどろかというのを身にしみておりました。こういうものを出すにはたくさんの学部の協力がある。果たしてどの学部がどの科目を持ってくださるだろうかというのが、私は非常に心配でした。総合教育部会長も心配しておられましたけれども、最後にはちゃんと揃いました。これも、先生方の熱意というのもありましたが、もう一つは、やはりさっきのサポートです。全カリという組織が、サポートを生み出しうるシステムを持っていたのです。

それから、最後はカネでした。総合科目Bを出してくださった責任学部には、最高3コマずつ非常勤講師をあげますと、最後に塚田先生が言ってくれたんですね。これがよかった。ああ、長年非常勤コマが欲しかった。それがもらえるんだったら総合Bを出してみようじゃないかという学部が続々と現れてきて、たちまち第1年次に7コマ揃ったんですね。これは信じられなかった。やがて、この中からいくつかの人気科目が生まれてきたわけでございます。いまでもありますが、例えば、「体験学習－環境と人間」なんてのは一番最初からお作りになりましたものです。体育の若い先生が先に立ってお作りになった。その他、「メディアとスポーツ」は社会学部の先生が中心に

なられたけれども、保健体育の先生がそれを助けられるとか、こういうものが出てきました。当時はあの3つの非常勤講師コマ、これはもう致命的に大事なことでした。私たちからみると、どうせ一人平均3万円ぐらいで、3コマと言えば9万円、9万の12倍として100万円ぐらい、そのぐらいがんばって作ってくださってもいいじゃないかと思いますが、経営のほうからいうと、そうもいかないらしくて、なるべく減らしたい減らしたいという一方でした。それがあの3コマのおかげで、さっと総合Bの陣容が整いました。

私はどこの大学に行っても言っております。カリキュラム改革にはカネがいます、それを覚悟しなくてはだめです、と。理事者の前では特に強調することにいたしております。

最後は、人事権を与えられていたことです。これは今でも、特に言語教育と保健体育に関して全カリのほうの人事になっていますね。これは大きかったと思います。これがなかったら、たぶんセンターの力は保てなかったでしょうね。

あのおかげで私は、全カリの中の隔意なき新任人事評価の議論を聞いたうえで、その結論を部長会に持っていき、来られた先生方が将来働かれる学部のことまで部長会で決めてもらって、安心していろいろな大学に割愛にまいりました。全国で6校ぐらい行きましたでしょうか。ずいぶん悪いことをした

わけです。いい方をどんどん抜いてくるといふ、罪深いことをしたわけですが、そのおかげで、言語教育などの改革が実質的にできるようになりました。

忘れられません、あのころ、その議論をやっていくうちに、だんだん教員人事の評価基準というのが変わってきました。オープンな場所で議論するとこれだけ変わってくるのかと私は思いました。だんだん議論を重ねていくうちに、語学の先生の場合、紀要の論文がない方はだめだということが、それまでは一番大きい基準だったようですが、それだけではだめなのではないか、これまでの教育経験の評価が必要ではないかという動きが出てきました。そういう教員人事選考基準の多様化が結果として出来たんですね。

どうしてかという、例えば英語の先生の人事の委員長を法学部の教授がなさるとか、あるいは理学部の先生がなさるとか、それができたからです。これまで口を出さなかった分野の先生の選考に、他の分野の方がなるというのは、「私は何もわかりません」と言いながらなられたとしても、やはり違うということです。ずいぶん大きい変化でございました。人事権は外しちゃいけないと思いました。

事務局のサポート、全学の合意

最後に申し上げたいことは、事務局のサポート、それから全学の合意、こ

れが大きかったということです。特に事務のほうできっちり支えてくれたのが何よりの力でございました。本当によくやってくさいました。部長が何をするかということを得たうえで、あるいはスケジュールがどう動くかということを得たうえで、また先生たちが一番知りたいことはどれかということを知ったうえで、サポートして下さる。教室の数とか、予想される履修者の数とか、それに比べていまの教室はどのぐらいのキャパシティがあるか。こういうように、私たちが一番不得意な部分、さっきの机問題のように気もつかなかったこと、これを支えてくださったのは事務の方たちでした。

のちになると、この方たちは、例えば第1回目の履修要項をつくる仕事にも全面的に入ってくださいました。

第1回目の履修要項はたいへんでした。それまでなかったものをつくらなくちゃいけない。最初の委員長だった某経済学部の教授はおっしゃっていました。「いやあ、今年は僕は何にも本を読みませんでした。読んだのはたった1冊、作った新しい履修要項です」。それぐらい煩瑣な仕事だったと思います。本当に凄まじいことでした。けれどもそれを支えられたのは事務の方です。

立教を定年になってから他の大学に行きまして、何人もの人に感心されたんですね。「全カリのやり方について詳しいことは立教大学の全カリセンタ

「事務室があるからそこへ問い合わせてください」と言って、問い合わせってくる人が何人もありました。非常に具体的な質問、例えば保健体育は何単位にして、どうしておられますかとか、いろんな細かいことを他の大学から聞いてこられる。すると、「とにかくあそこの事務室の人はだれでも、先生がいなくてもぱんと答えてくれるんだよね、驚きましたね」と私は何度も外でほめられました。それほどによく、教学支援をやってくれたと思います。それがなかったらとてもできませんでした。忘れられない協同作業でありました。

最後は、どうしてあんなことができたか。立教はどうしてあんなことができたかとよく外で聞かれますけれども、私はよくわかりません。一つは、非常に組織が巧妙だったんでしょう。つくりがよかった。私は、何も知らないでその上に乗った暗闇の牛でしたから、よくわからなかった。けれどもやっけていくうちに、ああ、これを支えているのは立教という大学のもっているある種の体質なんだなということを感じました。聞いていると、先生方が、この全カリという公の仕事にあんまり不平を漏らされないんですよね。文句はおっしゃってますけど、文句をおっしゃることと不平とは別です。

全カリの会議は、第1年次は午後11時に終わることは珍しいぐらいでした。午後11時半なんてことはしょつ

ちゅうあったんですよ。10時になんて終わったらみんな奇跡だといって家に帰っていくんです。その間、みんな本当に議論される。あれはそれまでいた大学にはないことでした。びっくりしました。そのほか、よく聞いてみると、学生が好きだとおっしゃる先生がすごく多いとか、長いあいだの伝統としか言いようのない部分ではないかと思えます。そういう伝統や力に支えられて、全カリは新しいカリキュラムを目指したわけでございます。ちょっと長くなりました。すみません。

名和 寺崎先生、どうもありがとうございます。ありがとうございました。

40分という制限時間ではとても語り尽くせないわけで、このあとからも別の語る時間を用意しておりますので、これくらいにします。

いま質問したい点があるかと思うんですけども、のちほど時間をとりますので、続けさせていただきます。

続きまして、嶋田先生のほうからご報告をお願いいたします。

嶋田 嶋田でございます。どうぞよろしくをお願いいたします。

ハンドアウトを用意しております。できるだけ要領よくお話ししたいと思います。お待ちしております。

私は、専門は日本文学です。しかも江戸の文学という、もう全く古色蒼然



嶋田 彩司氏

たるところをやっておりまして、寺崎先生のような教育学の専門家でもなければ、また立教大学とのつき合いというものも、実は何もございません。ですから、このような場でのシンポジストとしては、あまり適任ではないと思っていますが、ただひとつ、何かこういう場でお話させていただくことができることがあるとすれば、いま、私が勤務しております明治学院大学で、カリキュラムの改革に携わっているという点であろうかと思えます。

自己紹介も兼ねまして、少しその点から話させていただきたいんですが、全学共通科目教育機構というのが私どもの大学にあります。これはいま、寺崎先生の話にもありました、いろいろな大学に設けられた、一般教育部解消後にできました協議機関としての教育機構という名前のものの一つでございます。機構長は、いま私どもの大学の場合、学長が務めております。その下に外国語と、それから、立教大学で申します AB の総合科目ですね、私の大学では諸領域とそれを呼んでおります

が、それぞれに部会長というものがありまして、総合科目に関わる部会長を4年ほど務めております。

諸領域というのはいま申しましたように、外国語教育に関わる科目以外のすべての全学共通カリキュラムを管理するというか、コーディネートをする立場にあるというわけです。

ですから、今日司会をしてくださっています名和先生と、立場としては非常に近いんだろうと思っています。

先ほども申しましたように、明治学院大学は、いままさにカリキュラム改革のタイミングにあります。その渦中において、その取りまとめ役をしている者として、明治学院大学のことを少しお話をさせていただき、またそのような立場から立教大学の全カリというものがどのように見えるかということも、お話をさせていただければと思います。したがって、これから短い時間ですが、申しあげさせていただくことというのは、立教大学にとってはカリキュラムの運営システムという面については、もう決着済みのことがかなり含まれるかと思えます。その点をご了解いただきたいと思えますし、多少口がすべって耳障りなことを申し上げるかもしれませんが、それもご容赦いただきたいと思えます。

立教大学の全カリと全カリ運営センターの発足については、その当時から噂と申しますか、話はお聞きしておりました。詳細は存じ上げなかったわけ

ですが、非常にダイナミックな改革をされたということで、私だけではなく、多くの私立大学の教員がそうだったと思うんですが、目を見張る思いでその話を伺ったということを記憶しております。先ほどもお話がありました、1994年から1995年にかけて全カリ運営センターが発足し、一般教育部が解消される。そして1997年に新しいカリキュラムが実施になるというのは、5年半というずいぶん長い時間をかけてと寺崎先生はおっしゃいましたが、私のように外部から見ますと、かなりスピーディーにことが運んだと、見えております。その点、明治学院大学は全くのところのろいわけでして、実はほとんど何もかたちになっていない大学なんです。これはたいへんお恥ずかしい話なんです。一応1998年に全学共通科目、こちらでいう全カリというのがスタートしました。しかし、これは実際は外国語および保健体育科目の必修枠を若干見直して、それ以外のいわゆる3系列2部門という科目の構造というのは、そのまま踏襲したというものでした。ですから、抜本的なカリキュラム改革というには、とてもじゃないけれどそうは言えないようなものであったと思います。しかも、一般教育部の組織解消は2001年度末です。つまり今年の3月によく解消いたしました。そして、2002年度の4月、つまり、今年のこの4月から、それに替わるものとして、教養教育セ

ンターという新しい部署が発足したというわけです。

ですから、現時点では、カリキュラムというのは、形式的には第二次の改革となるのですが、実質的には、ようやくカリキュラム改革の端緒についたばかりと言ってよいかと思います。全く本当にウサギとカメのような歩みの違いで、立教大学の改革というのは、たいへんうらやましい思いで見えていたというのが率直なところです。ウサギとカメと言いましたが、最後にカメが勝つということを寓意しているわけでは決してございません（笑）。

会場 （笑）

嶋田 きょう持ってきたんですが、この『立教大学〈全カリ〉のすべて』という、このドキュメントを、実は、出たときにすぐに購入して拝読いたしました。たいへん読み物としてもおもしろくて、多少なりとも大学のカリキュラムに関わっている人間が読めば、書かれていない言外のご苦労というのは、何となく見えてくるところがあります。私は文学をやっておりますので、それだけでも読み物としてはおもしろかったんですが、今回、カリキュラム改革を、私たちの大学でも本腰を入れてやろうということになって、改めて読ませていただきました、たいへん参考になることがたくさんあったと思います。あるいはまた、このシンポジウムにお招きいただくにあたって、いくつかの資料も頂戴いたしまして、それ

もざっと一読させていただきましたが、そこにもたいへん有益な事柄がたくさん記載されていたように思います。

今日、私の話というのは、何ほどかの批判的精神をもって立教大学のカリキュラムについて生産的な提言を行うということなんだと思うんですが、実を言いますと、あまりそれほど何か有益な話ができそうにはありません。教育の理念と言いますか、教育の目標、あるいは、その具体的な現れとしてのカリキュラムについては、方向性という点では同じと言うのはたいへん僭越なんですけど、私たちが考えていることをすでに立教大学が先を走っていらっしやると感じるわけです。同じようにキリスト教に基づく人間教育を、大学の教育理念に掲げている大学です。リベラル・アーツの重視という点でも、明治学院大学も同じような目標を掲げてきました。ですから、考えてみますとあまり大きな差がないというのは、当然と言えば当然かと思えます。

ただ、若干所与の条件が違いまして、先ほど寺崎先生がおっしゃいましたが、明治学院大学には自然科学系の学部がございません。それから、文学部についても、例えば、史学科のようなものがございません。そういう意味でのスタッフの層の薄さを、それから、それらの分野の教育の蓄積のなさというものは、たいへん大きなハンディ・キャップになるのではないかというこ

とは考えてはおります。

しかし、繰り返しになりますけど、そういう事柄を除けば、大きな方向性として、私は立教大学の目指しておられるものについて、何か批判がましいこと、あるいは、批評がましいことを申し上げることは何もできないわけです。

ただ、同じ方向性を持ちながら、同じことを目標としながら、それをどのように実現としていくかという方法論については、若干違う道を歩み始めているのかなということを感じます。立教大学の全カリの一つの基本姿勢というのは、本の中にも何回も出てまいりましたが、全カリの運営というのを全学部で行うという大方針だと理解しております。明治学院大学ではあえて、と言いますか、その方法をとらずに、教養教育センターが主体的にそれを担っていくという方法をとりました。これは、簡単に言いますと、一般教育部のスクラップ・アンド・ビルドのようなものだ、とりあえずイメージしていただいてもよろしいかと思えます。

この教養教育センターというのは、いまのところ非常に不完全な組織です。これも、大学の内情をこういふところでどこまでお話ししてよいものか、これが活字になった際にまたそれが問題にならなければいいなど、少し恐ろしくはあるんですが、正直に申し上げますと、旧一般教育部の先生方、教員が全員、教養教育センターに残っ

たわけではありません。約半数です。半分の方は、現在、既存の学部、学科に分属されております。そのかわりに、主に文学部ですが、既存の学部から教養教育センターに合流された先生がいらっしゃいます。そういう先生方を加えて、新しく再結成された組織が教養教育センターというわけです。

立教大学が全学でということ为原则とされたその背景には、一般教育科目というのが制度的な保障があったものですから、一般教育部の教育というのがその保障の上に、言葉は悪いんですが、あぐらをかくようなかたちで教育が硬直化したという批判があったものと理解しています。私も実は一般教育部におりましたので、それはかなり腹の立つ批判でしたけれども、そういう批判があったことは事実です。私たちも、実はその点は十分に自覚をしております、その反省の上に立ってもう一度、教養教育と言いますか、全学の共通科目教育を主体的に担っていく組織を再構築しようということを選んだわけです。ですから、ある意味では、有志による再結成のようなものだとお考えいただいても結構です。

ただ、補充人事に関しましては、実質的になんですが、一定数に達するまでは、教養教育センターでリプレースメントを行うと、そういう動きになっているということは申し上げてよいかなと思います。

そういう教養教育センターが新しく

発足したという状況下で、新しいカリキュラムの提案というのを、これは学長から要請されました。ある意味では、発足したばかりの教養教育センターが、その力量を問われているような、そういう最初の機会だと私たち自身は思っています。

そのカリキュラムですが、先ほど、方向性としてはだいたい同じである、同じと言うのはたいへん口はばったいので、勉強させていただくことがたいへん多いということを申し上げましたが、現象といいますか形式的な問題でやや違うところがあります。それについて大きく、二つの事例を申し上げさせていただきますたいのですが、一つは外国語教育です。

外国語教育は、立教大学では日本語教育も含めて言語教育科目と位置づけられておられるようですが、私たちの大学では、基本的に英語と初習語とを完全に切り離そうと考えております。むしろ、英語をコンピュータ・リテラシーの教育科目と組み合わせまして、ある種のコミュニケーションの基礎科目としてカリキュラム上に位置づける。そして、いわゆる初習語、かつて二外と呼んでいたものですが、初習語に関しては、むしろそれ以外の、いわゆる講義科目と言えいいでしょうか、こちらで言う総合科目のようなものと一体化させるかたちで、初習語の教育ということを考えていこうと構想しております。

いま言いましたように、初習語は、むしろ講義科目と一体化することによって、総合的に自己あるいは他者の文化理解というものを一つの目標として、カリキュラムを構成していく。したがって、教員組織の問題で言いますと、いわゆる外国語教育に携わっている教員という組織の形態がなくなってしまうということになります。

これは、実はまだ実現の半ばですので、それがどのような弊害を生むかというのはいくらかの予想はつきましますし、実は反発もあるのですが、現時点でそういう構想があるという程度にご理解ください。

それから、それと関連してですが、いわゆる総合科目と言うんでしょうか、総合のAとかBに相当する科目に、発展的な科目というのを設けようということを考えております。つまり、総合Aというのを、立教大学ですと6つのカテゴリーで科目を展開されていますが、私たちは7つに考えています。その7つの上に、その積み上げ型の科目群というものを構想しております。その発展的な科目群を設けることによって、学生に必要な学習環境を提供できればと。

これは、一時期ずいぶん議論されました、メジャーとマイナーという考え方ではむしろなくて、やや後ろ向きの発言だと受け取られるかもしれませんが、大学の現状を考えたうえで、学部学科の専門教育に必ずしもモチベーシ

ョンを持ちえない学生を、共通科目の積み上げ構造の中で、いくらかでもすくひ上げていけたらという考え方を基本に持っております。

これも若干、アナクロリズムだとおっしゃられるかもしれませんが、この構想は実は、学部学科の先生方からはあまり大きな抵抗はなくて、むしろ、そうやって共通科目教育が学部学科の学生のいくぶんかでも引き受けてくれるならば、かえって学部学科の専門教育が純化できると言いましょか、モチベーションの高い学生だけをいわば拾い集めるかたちでできるという意味で、実は、これはお互いにそのへんで、非常に不思議なかたちで利害が一致してしまうわけですが、そういう点で、必ずしも大きな反発は感じておりません。

専門教育の教科などと言いますと、なんだかこれもまたアナクロだと言われそうですが、実はそうではありませんで、基本的な考えは、学部学科における専門科目の教育と同様、全学共通の科目群における教育も、どちらも入学から卒業までと言うか、入り口から出口までの積み上げ構造のカリキュラム、段階的なカリキュラムを用意し、そしてその両方が教養教育であるという考え方を基本的に持っています。

今日のシンポジウムのテーマにあります、立教大学の「専門性に立つ新しい教養人の育成」というスローガンと言いますか、キャッチフレーズで、こ

れに少なぞらえて言うならば、私たちの大学では、学科での教育と同様に、全学共通カリキュラムでの教育もまた、積み上げ構造を持つことによって、学科で得られる専門性とまた違った領域での専門性獲得の場を、学生に提供できるのではないかということを考えているわけです。

その、ある種の積み上げ型の教育を実現するためには、当然のことですが、そのプランニングをする組織がどうしても必要になります。あるいは、それを維持し、さらにメンテナンスというのをちゃんとやっていく組織が必要になります。私たちの大学の場合は、その組織を、立教大学の運営センターのようなものではなくて、一つのそこに教員が所属する教養教育センターというものを作ることで、そこに任せたと行ってよいかと思えます。

ですから、教養教育センターは、新しいカリキュラム・プランの中で、外国語ですとか保健体育科目も含めた諸科目の再統合とでも言いますか、言葉にするとたいへん立派に聞こえますが、そういうことをやはりやっていかなければいけないと考えております。

立教大学のカリキュラムで申しますと、総合Aで学んだことというのは、総合Aは、私もカリキュラムを拝見してたいへん魅力的だと思うのですが、仮に学生がそのすべてを履修、あるいはかなりのボリュームでそれを履修すれば、それは意味のあるものになるか

もしれませんが、実際に卒業要件の最低が20単位ということですので、仮に、私などは通年の意識がまだ強いものですから、通年4単位に換算しますと5科目なわけです。それでOKになってしまうとすれば、その5科目だけをつまみ食いをしてしまった学生にとって、いったいこのカリキュラムの総合というのはどういう意味があるんだろうという気がします。

それはもちろん私たちの大学にも言えることがわなわけで、この立教大学にユニークな問題ではなくて、私はむしろ、こういうカリキュラムの宿命的な欠陥なんだと思うんですが、その発展的な科目というレベルを科目の中に作ることによって、いくつかつまみ食いをした者を、総合Aという科目群の中で文字どおり総合していく場というのを与えられるのではないかということを考えているわけです。

おそらく、総合Aで学んだことを総合する場として、こちらで総合Bを位置づけておられるということでは決してないと思いますので、そうであればつまり、聴きっぱなし、あるいは学びっぱなしではない、何かそれを、カリキュラムを提供する側ではなくてカリキュラムを受ける側、学生の側が、文字どおり総合していく機会というのが必要ではないかということを少し感じております。

ところが、こういう積み上げ型の共通科目教育というのは、実は難点がい

くつかありまして、簡単に言いますと、このカリキュラムをどんどん完成に近づけていこうとしますと、いわゆる教養学部、教養学科構想になってしまいます。それがあまりに露骨に出過ぎますと、専門学部の先生方からはかなり警戒感を持たれるという面が、一面であります。

それからもう一つは、これがたぶん一番大きな難点だと思えますが、教養教育センターがそういうかたちでカリキュラムを、一義的な意味でその責任を持つことによって、それ以外の学部学科の先生方の中に、共通科目教育に対する無関心というのが醸成されてしまう。このことはやっぱりたいへん大きな恐ろしい問題だと思っております。

もちろん、科目は教養教育センターだけで開講するわけではありませんので、実際は学部学科からたくさんの科目を提供していただきます。それから、学内の研究機関、研究所の類ですが、それらからも科目を提供していただいて、それを単位認定しようということも考えております。

ですから、全学的なネットワークということには留意をしているつもりですが、かつてあったような、私たちは専門を教える人間、あなたたちが教養教育をやりなさいという悪しき住み分けのようなものがまた再現してしまう、そういう危険性をやはり私たちは感じてはおります。

もちろん、立教大学のスタイルと明治学院大学のスタイルとどちらがいいかというのは、たぶん10年後くらいを見てみないとわからないと思います。もし10年後にこういうシンポジウムがあればぜひ、お呼びいただきたいと思えますけれども、よし悪しは別としまして、いま申しましたようなスタイルを選択した大学の一員としまして、最後にもう一点だけ、立教大学のスタイルというものに、ある種の危惧と言いますか、そういうものをちょっと感じる点を一つだけ、できるだけオブラートに包んでお話をしたいと思います。

私は、一般教育部に15年在籍しました。それで教養教育センターに移ったわけです。私たちの大学では、15年というのは、一般教育部のちょうど半分の年月になるわけで、ちょうど頂点から下り坂にかかったところから、私は一般教育部にずっと所属していたということになります。

先ほども申しましたが、一般教育部は、大学教育の硬直化の元凶のように目されて、ある時期から、特に大綱化前後から、たいへんなバッシングを受けてきました。もちろんこれは、組織内部にいた者の、ある種の被害者意識も混じっていることはあります。

しかし同時に、一般教育部の内部にいた人間は、それなりの危機感を持って努力もしてまいりました。立教大学でももちろんそうだろうと思います。

と言いますか、寺崎先生が先ほどそういうことをおっしゃっておられました。

新しい科目を作る、もうすでにいくつかの、たぶん立教大学にもないような試み、例えば、教養ゼミのようなものを私たちは、科目としては教養原論と呼んでますが、そういう枠をつくって、少人数のかなりおもしろい、自由な発想で授業をプランニングできる科目群を設けました。あるいは立教大学の総合Bのようなものも、私たちのところでももうすでにやっておりました。

ただ、そうやって私たち一般教育部にいた人間が、ある種の危機感を持ってカリキュラムや教育の改革というのに取り組んできたその背景には、これはよくも悪くも、やはりある種の外圧があったということを感じます。その外圧というのは、言葉はたいへん悪いですけれども、専門学部学科の先生方の厳しくも冷ややかな眼差しと言いましょうか。厳しくも温かい眼差しだったらありがたかったんですが、どこかやっぱり非常に冷淡な眼差しというものを、私たちは、率直に言って感じておりました。それが一つのバネとなって、私たちのエネルギーになっていたということも感じます。

そういう点で言いますと、立教大学の採られた新しいシステムというのは、そういった意味の外圧というのは全部なくなるわけです。専門学部学科

の先生方みなさんが全カリ科目の担当者でもあると言いますと、外圧という言葉を使ってしまったのが、どうも何か失敗だったかという気はしているのですが、カリキュラム発足後、しばらくの熱気なりエネルギーなりというのが一段落したあとで、外からの厳しい眼差しというものがなくなったということで、科目の提供というのがある種義務化し、マンネリ化し、結果として教育目標というのが空洞化してしまう、そういうおそれはないだろうかということ、たいへん余計なお世話だと言われそうですが、感じております。

実は、私たちの大学で、立教スタイルではなくて、教養教育センター方式というのをとった背景に一番あるのはやはりそういうことへのおそれなわけです。もちろん、センターだったらマンネリ化しないかと言うと、それはそうではなくて、絶えず厳しい批判というのにさらされていかなければ、おそらく硬直化してしまうと思いますが、いま申しましたようなことを、失礼ながら漠然と感じます。

おそらく、それを回避する方策というのはたった一つ、正当な意味での外圧だと思うのですが、学生さんの声をやはり聞いていくことだと思います。先ほどのごあいさつにもありましたように、シンポジウムで学生さんの声を吸い上げるということもなさっていらっしゃるようですが、たいへん失礼な言い方ですが、私の経験で言えば、

Ⅲ 質疑応答

シンポジウムに出てきてくれるような学生さんというのは、ある意味ではたいへん意識のある学生さんです。彼らが話してくれる事柄というのは、それが批判であっても基本的に愛情に満ち満ちた批判で、むしろ一番の問題は、声も出してくれないような学生さんの声をどう吸い上げていくかということが、たいへん難しいことであり、自分でできもしないくせにこんなことをしているのですが、一番大事なところではないのかということを感じたりもします。

私のほうも時間が多少過ぎているので、もう終わりにさせていただきたいと思いますが、立教大学で目指しておられることというのは、私たちにとってはたいへん参考になることばかりです。私たちの大学との比較において申し上げましたことは、ある意味では非常に取るに足らない揚げ足取りに過ぎないのかもしれませんが。失礼な発言がありましたらご容赦ください。それでは、これで終わりにいたします。

名和 嶋田先生、ありがとうございます。明治学院大学の組織の話と、立教大学の総合科目の抱えている問題点を何か的確に指摘されて、重い宿題が出されたという感じがいたします。

名和 それでは、これで報告者のお話を終わりにして、質疑応答に移りたいと思います。ご質問のある方は、所属とお名前を言ったうえで、寺崎先生、あるいは嶋田先生への質問ということをお願いしたいと思います。では、ご自由にご発言ください。

山本 言語部会長の山本です。寺崎先生に少しお伺いしたいのですが、単なる昔話ではなく、今お話いただいたことを踏まえて、今後立教の全カリは何を目指すのか、その点どう思われますかということをお願ひします。

寺崎 さっきそこは言わなかったなと思っておりました。

その前に、一つだけ補わせていただきますと、いま学生の声というのがありましたけど、この6月に私は、「教育学概説」という教職課程の科目で、全カリの話をいたしました。登録は前期で110人ぐらい、常時出席が95、6人ぐらいなんですけど、そこで1時間かけて、いま日本の大学はどういうことに直面しているか、立教で全カリというのを作ったのはどういうわけか、という話をしてみたくです。

たいへん学生の反響は大きかった。95人のうちの60人ぐらいが1年生なんです。その彼らが言ったことの第一は、今日聞いて初めて全カリって何だかわかりましたと申しました。これ



は庄司先生よくお聞きになってください。どこかで彼らは、本当のことを聞きたいんです。思い出話でもやっぱりやれば、彼らは聞くんですよ。

それからもう一つ、95人の中のかなりの数が、「これでやっとわかりました」と言うんですよ。自分の高校の同級生、今はよその大学の学生と、「どの科目を登録しようか」と相談したりするんだそうですね。で、「いいねえ、立教は。そんなにたくさん科目があるんなら何でもとれるじゃない」、と言われるというのです。みんな不思議がりました。「やっぱりそれは、これがあったからですね」と語るのです。

二人だけ、「私は納得できません」というのがありました。男の学生と女の学生、どちらも1年生です。その一人は、英語のコミュニカティブの授業の程度が低い。内容がいかにも低すぎる。あれでは私たちはとても力はないと思うし、教養的に満足できないというのが一つです。もう一つは、総合科目についてです。「総合科目に出て空洞化に驚きました。私語はいっぱいあるし、先生はそれを意に介さず、ただただ前のほうでしゃべってるだけ。これでは総合科目の名に値しないと思います」と言いました。次の時間に、その二つをみんなに紹介しました。

「だいたいみなさん感心してくれて僕もうれしかったけど、この二つの異論がある」と紹介しました。そしてその総合科目に不満を言った学生には、「そういう不満があったら担当の先生に、あなたはそれをぶっつけなさい。学生も参加していい授業を作っていくのが大事だというのは、全カリをつくったころわれわれも考えたことなんだ」と申しました。

それから、コミュニケーションのレベルが低いと言った学生には、「あなたがとにかく話題をどんどん出して行って、わずか30人しかいないんだから、コミュニケーションのレベルを上げるようにがんばってください」とお説教したんですけどね。おじいちゃんになると、このぐらいのお説教をしても向こうは受け入れてくれます。

二番目は、今後のことですが、私は、例えば、カテゴリー科目名というのにあがっている、R科目とかT科目とかF科目、これはとてもうれしいです。これらは何を表しているかと言うと、カリキュラムのイノベーションが進んでいるということを表しているのです。

全カリの部長を辞めるときに、先生方に小さな文書で訴えたことのうちの一つが、いま全カリは始まったばかりなんだということでした。全カリが発足したというよりも、全カリの改革が始まったばかりだと思ったほうがよい。カリキュラムというのは、絶えざ

るイノベーションが必要なのです。ですから、こういう科目があって、新しい科目がどんどん出てきて、それではやってみようかという先生方がおられるあいだは私は大丈夫だと思う。イノベーションは毎年やっていただきたい。

それからリースマンがアメリカの大学の改革のことを書いている本の中で、アメリカの大学改革のことをスネイク・ウォークと言っています。ちょうど蛇が動くように、少しずつ前と同じような動き方をしていきながら、全体としてやっぱり前に行くんだと。私はカリキュラムもスネイク・ウォークであると思います。少しぐらい方向がずれるときがあるかもしれない。けれどもやはり前に進んでいく。蛇は後ろに下がらませからね。前へ進んでいくというのが大事でないかというのが一つ。

二番目は、今最後に先生がおっしゃったこととダブるかもしれませんが、私は全カリの精神、原則というものを大学教育の中に生かしていくとするならば、最後の改革目標は、専門教育の改革だと思っています。そこまで行かないとたぶん完成しないと思います。そこが実は一番難しいところだと存じます。

ただ、長い目で見ると、例えば、法学部、経済学部のような巨大学生を抱えている学部、あるいは、工学部のような非常に規模の大きい、そしてたく

さんのリソースが必要な教育部門がいまどうなっているかと言うと、少し長い目で見れば、それは圧倒的に大学院に移っているわけです。ロー・スクールにしてしかりですね。ロー・スクールができたあと、アンダー・グラデュエイトの法学教育はどうあったらよいかというのは、直ちに大問題になると思います。

突きつめると、リベラル・アンダーグラデュエイト・スタディーズというところに結局行かざるをえないのではないかと思いますね。そうでなくて、缶詰になったような知識のセットを、ともかく4年間のあいだにあるところまで押しつけて卒業の水準を保っていくという発想は、もう効かなくなってくるのではないか。むしろそれは、大学院のほうでどうぞという時期が、長い目で見たら必ず来ます。

2010年には、大学院生の総数は留学生、社会人を含めて25万人になるというのが大学審議会の予想ですが、これはもっと増えるかもしれません。25万人ということは、旧制大学や専門学校とか、あるいは師範学校なども含めた旧制時代の日本の高等教育機関在籍者の総数55万人の約半分になります。つまり、旧制大学の半分の学生がマスターになるという時代が、簡単に来ると思います。そこにむしろ預けていい部分というのが本当はあるのではないかと。本心を聞いてみると、例えば、工学部の先生だって、卒業の段階で完璧

なエンジニアをつくろうなんて無理だと思っておられるんですね。ですから、東大などですと80%ぐらいは大学院の最低マスターまでは行ってしまおうという事態に、もうすでになっているわけです。

今うかつに言うと、学部を否定するのとか学部教育の重要性というのをどう考えているのかと言われるかもしれませんが、私はやはり長い見通しでは、そこまでの見通しを持っておいたほうが良いと考えています。ということは、学部専門教育のリベラリゼーションというのを自主的に目指すことにきつとなるだろうと思いますね。その方向へ、全カリはやはりたゆまず進んでいかれるべきだというのが私の考えです。

名和 どうもありがとうございます。他にご質問、ご意見がありましたらどうぞ。

坂倉 文学部の坂倉です。嶋田先生、きょうは遠いところをいらしていただいて、たいへん貴重なお話を伺わせていただいてありがとうございました。本当にいろいろ参考になりました。

少し簡単なことでご質問させていただきたいのですが、明治学院大学では、立教で言う総合科目の中に、発展的な積み上げ科目を作っているというお話でした。それは一方で、悪い言い方かもしれませんが、学部学科の不本意修学生の受け皿になっていて、

また一方で、より積極的に見れば、ある種の方面に意欲のある学生の受け皿になっている、というような考え方をご紹介いただいたと思います。そのように考えた場合に、学生の履修区分、大綱化以前ですと、教養科目であるとか、専門科目がかなり細かなカテゴリーごとに分けられていて、それぞれのカテゴリーから決められた単位を履修しないと卒業要件を満たせないかたちになっていたと思いますが、そのへんどのようなになっているのでしょうか。お聞かせいただけますか。

嶋田 基本的に、卒業要件は大綱化以降、学科が決定権を持っております。これは、インターネットで立教大学の履修要項を拝見しましたが、私たちとあまり変わらなくて、全くばらばらではないけれど、しかし多少でこぼこがある。明治学院大学も同じです。学科によっては、実質的に128単位のうちの半分を超えるような単位まで、共通科目の履修を認めている学科もありますし、もう少し少ない学科もございます。

こちらでは何という用語を使われていたか忘れてしまったのですが、フリーゾーンという概念を用いまして、専門科目でも共通科目でもどちらでも可能なものというのが、だいたい20単位前後の幅で設定してあります。

ただ、それがうまく生かしていける、そういうシステムの中で、共通科目を履修していく学生と、そうではない、

もう何単位まで、これ以上は認めませんという学科の学生とがやっぱり混在しておりますので、私たちとしてはできれば全学共通の名にふさわしい、共通のシステムというのを作りたいとは思っておりますが、これはたぶんなかなか難しい問題がいろいろあるんだろうとは思っております。

名和 他の方、別の質問がありましたら。

大矢 社会学部の教員で診療所の医者でございます。いま先生の話聞きまして、私も教員の仲間に少し入っております、全カ力で「健康の科学」を担当しています。どの分野もそうですが、学ぶことが多くなって、教育期間、学習というのがだんだん長くなり、人生の後ろへとずれているわけですが、実は、脳の発達面から見ますと、学習にも時期があって、おそらく後ろへやってもあまり意味がないのではないかという気がします。人間の最適な学習時期で進歩するのは、だいたい35歳ぐらいまでで、それ以降は、人によるかと思いますが、寿命が伸びてもなかなか伸びないという生物学的な問題があるのではないかと思います。

したがって、今の傾向から見ますと、今後確かに大学院がおそらく専門教育の中心のプロセスになるのだろうと思われそうですが、そうすると限界がだいたい34、5歳ぐらいだと思います。そうすると、実際に効果的に働くのは、

あと5年ぐらいしかなかろうかという感じがするわけです。だからむしろ、先生の教育のほうから考えていращやる、こういう全教育的な問題は、実はもう少し後ろへ後ろへと押すのではなくて、むしろもっと前へ前へと前倒しすることも必要があるのではないかと思うんです。

それは今の傾向とは反対、すなわち、いまものすごく逆説的なことを言おうとしているのですけれども、全体の流れから見ていると、今の教育、学習の問題がだんだん後ろへ後ろへと押され、結局、高校の教育を大学でやる、大学の教育が大学院にまわるという現実の問題から考えてみると、ひょっとするともう少し逆方向の発想も今後出てくるのではないかと思います、そのことについて先生いかがでしょうか。

寺崎 領域によるんじゃないでしょうかね。例えば、数学を後へ後へと押しやるのはいけないと思うんです。物理学もおそらくそうでしょう。でも、化学になると少し違っている、ということがあるんじゃないでしょうか。81歳でノーベル賞をとる人と、30歳代でとる人とあるわけで、その点は私はおっしゃるとおりだと思います。

ただ、別の観点から言うと、例えば大学教育の位置づけが、生涯にわたる学習のあるステップだと見た場合、大学教育はどこを担うのか。

私は、学生たちに第一は健康だと言

ってます。80何歳まで生きるとすると、あなたたちの学習期間はあと60年ある。その間、一番大事なのは健康だと。だから、大学でも保健体育を休んじやだめだということ。

二番目は外国語の力です。少なくとも一つは発信力のある外国語の力を持っていなければ、今後の世界は乗り切れないだろう。この基礎はいま作っておきなさい。卒業してからまた次に得意な外国語ができるかもしれないけれど、いまはほかにかえがたい貴重な時間だ、と言っています。

最後は、人間関係をつくっていく力。最近私どもは東京都区内に勤めておられる小学生から中学生のお子さんを呼んでおられる30歳代前半の現職の社会人の方29人にヒアリングをしたんです。29人を6グループぐらいに分けて、長時間の座談会をやっていた。いったい生活者として最前線にいる方が何を大事だと思っておられるか。子どもにどんな力をつけたいと思っておられるか。これを聞いたかったです。そこで出た結論の一つは、やはりみなさん、基礎的な力はつけてほしいとおっしゃってます。しかし、その基礎的な力のつけ方について、以前とだいぶ感覚が違うなということがわかりました。つまり、子どもによってスピードが違うだろうと。そこは認めてほしい。九九を3年生のうちにきちっと言える子と、4年生にならなければできない子もあるかもしれないけ

ど、先生たるもの、そのへんの違いはきちんと持つぐらいの人間性を持っていただきたい。これが親御さんの一つの主張ですね。ですから、何はともあれ、若いときに詰め込んでおけばよいという考えではなかった。

もう一つは、人間関係をつくっていく力。この重要性についてはもう全員、あらゆる職種で共通しているとわかりました。そう見ますと、大学が生涯にわたる学習のどの部分を担当するか、こういう視点がこれから必要ではないかと思えますね。

名和 どうもありがとうございます。こういう機会ですので、ぜひ寺崎先生、嶋田先生に何か伺いたいことがありますら。

寺崎 嶋田先生に伺いたいのですが、先ほどのお話を私もおもしろく聞かせていただきました。つまり、例えば、教養原論から入って、それから先に行く、つまり教養教育のシーケンスを作っておくということですね。

学部の専門教育を受けなくても、いわば副専攻の専攻のようなかたちで卒業できる。その学生たちには、学士号を出されますか。それから、それをやっているあいだ、身分上はこの所属になるのでしょうか。

嶋田 メジャーとマイナーという発想とは少し異なるということを申し上げたのですが、これを副専攻と明確に位置づけてしまうと、いま先生がおっし

やった非常に難しい問題が出てきます。

実はある種のこれはレトリックなのですが、そういう言い方を設けなくて、実質的に学生たちが、出口が経済学士であろうが何学士であろうがそれはかまわない。ただ、学生がともかくも、出口のところで何かの達成感を持って出てくれればそれでいいのではないかと。非常に幼稚と言えれば幼稚なのですが、私たちはいま現時点ではそういう考え方が基本です。やはり難しい制度的な問題がありますので、そこはあまり突っ込んで、そこへはむしろ行かないようにしているというのが正直なところですよ。

学生 A 社会学部現代文化学科1年のAと申します。きょうは全カリが目指しているものが私としてはよくわからなかったもので、このシンポジウムに参加させていただきました。

私たちが初めて立教大学に来たときに、全カリというものは何の略かもよくわからないような感じで、履修の組み方も全然わからなかったもので、先輩の人に、この科目はこうだからと言われながら、全カリを取ったんですけれども、どのような目的をもって科目を選んでいいのかが、まだよく見えていないんですね。例えば、自分の興味のあるものを選んでいいのか、それとも自分の専門をもう少しいろんな場面から見るために選ぶものなのか。

やはり私たちとしては、この科目は単位が取りやすいとか、そういう面で選ぶものもありますし、全カリを作った方の側とすれば、どういう目的を持って科目を選んでほしいというのがあれば、教えてほしいんですけども。

寺崎 当初私どもは、あなたが社会学を専攻されるのに必要な全カリの科目はこれこれこれというかたちで選んでほしいとは全く思ってませんでした。むしろ、それと違う科目を選ぶ、それをなるべく「好きで選んでほしい」というのが、あのころの暗黙の考えではなかったでしょうか。

ただ、語学だけは、これはきちっとしたい。絶対外しちゃいけないと思った原則は、少人数ということでした。これはもう必死で追求しました。それから、一か国語ではなくて、二つはやってほしい。このことも外しませんでした。

要するに、専門に特化した、あるいは、それに役立つような総合科目の選び方をしてほしいとは、あのころだれも思ってなかったと思います。その後、どうなっているかはいまの先生方からお聞きください。

名和 よろしいですか。ではまた他にありましたら。

浅井 コミュニティ福祉学部の浅井と申します。全カリの科目、特に総合A科目について、体系化すればするほど、あるいは、多様化したり広域化してい

けばしていくほど、そういう意味で豊富になっていくと、学生さんはそれを学ぶ際に、穴あけ的な、あるいは、非体系的な取り方をする可能性がむしろ多くなりますね。

そうすると、われわれの目指している全カリのねらいと、学生さんの中に、カリキュラムあるいは、学習体系として構造化されるものが異なってしまう状況が生ずるのではないかと。そしてそれは、学部との連続性を欠くような面もあるのではないかと思います。そうすると、われわれの目指しているものと反対のような局面がむしろ出ないだろうか。「専門性なき無教養人」みたいな可能性もあるのではないかとということをお心配するわけです。これが一つです。

そして、もう一つの問題は、これも全カリの構造から出てくる問題のひとつだと思うんですが、500人規模のクラスが多くなっており、中には1,900人の授業もあるということになると、全カリの授業をマスプロ教育として組み立てないといけないような状況が出ますね。そうすると、少人数で本当に伝えたいことが、総合科目の中ではなかなか伝えにくくなる。全カリ構造自体は、そういうシステムとして、構造としてマスプロ教育にならざるをえないという問題があるのではないかとと思うのですが、そのへんはいかがでしょう。あるいは、それをどう克服すればいいかということを含めてお願いいた

します。

寺崎 おっしゃったあとのほうの問題は、かつての一般教育科目が全国的にそうでした。あらゆる大学の科目の中で、気がついてみたら実は教養部の講義だけがマスプロを全部請け負った。そうなっていましたよね。

これは、一つには構造の問題があると思います。構造的な問題というのは、実際は教員を用意できないとか、物理的な問題。教室を作ることが難しいとかですね。これが一つあると思います。

二番目は、これは構造の問題じゃなくて、質の問題というのもあって、それには二つの側面があるんじゃないでしょうか。一つには、質のほうです。学生たちが集まるだけの講義をする先生がやっぱりおられるんじゃないでしょうか。学生諸君はその点、決して愚かではないように思います。全員が楽勝科目になだれ込むと見ているのはわれわれのほうで、実は学生諸君はかなり伶俐で、聴きがいのある講義というの見分ける力があるということが一つです。二番目の問題は、これは文字どおりどうしようもない「楽勝科目」ですね。これを克服するにはもう、授業の質をよくしていくということしかない。どうやったら授業の質がよくなるかについて、やっぱりFDが必要なんじゃないでしょうか。いろんな知恵を私たちは共有していかなくちゃいけないと思いますね。

前のほうの問題は、学生全体の学習の体系と、カリキュラムが予想している教授の体系との乖離という問題です。難しいですね。論理的に追い詰めていきますと、全カリ的なカリキュラムを徹底させていけば、学部解体なんですよ。で、どこへ行くかということ ICUになるんです。4年生のときにメインは、私はケミストリーです、私はフィジックスです、私はソシオロジーです、私はエデュケーションです、ということになります。そういう形での専門性は持っている。しかし、大学自体は全部1学部だと。論理的に言うと、そうなると思います。

ただし、そこへ行くのが正しいということは、私は、論理的には納得できませんが、現実性は薄いと思いますね。だから、学部という組織を一応前提にしたうえで、中身を変えていくしかないだろうというのが、私の印象です。

名和 だいぶ時間がたってきたんですが、最後に一つ質問がありましたら。ぜひ聞いておきたいということがありましたら。どうぞ。

柴崎 理学部の柴崎といいます。今、担当しているのは「宇宙の科学」です。私の授業には180人ぐらいの学生がいますが、大半は文系の学生で、それがまたおもしろいところですよ。授業の目標は、宇宙が生まれたところから始めて、宇宙はどうなっているのか、それとわれわれはどう関わっているの

か、というところをなるべく伝えるようにしています。

ところが、3年も4年もやっていると、自分自身がその授業に感動できなくなってきました。最初は学生たちに感動を与える授業だと思っていましたが、だんだんマンネリ化してきて、空洞化するわけなんです。

学生たちに授業で何を知ってもらいたいかと言うと、やはりものごとを解決していくところのおもしろさみたいなものが少しでも伝わればいいなあと考えています。ところが、それは理系の学生にとっては専門の授業でたぶん解決される。ただ、文系の学生にとってはそこで終わってしまうんですね。

ですから、そのあたりをどのように授業の中に組み入れたらいいのか。やはり基礎がない学生なので、その点を伝えるのはなかなか難しいと思っています。その点は、どのようにしたらよいか、いかがでしょうか。

寺崎 いまの問題は難しいですね。私は、さっきおっしゃったような内容の講義でしたら、学生が虫食いで取っても十分プラスになると思います。経済学部の学生が先生の宇宙の、その科目を取るだけで、私は教養がつくと思いますね。ただしご自分が感動しなくなるというのは、これはまた大問題で。

会場 (笑)

柴崎 たくさん的人数がいれば、その先生方が交代してやってくれるからいいと思います。やはり全カ리를担当

してくれる先生というのは限られるので、毎年、候補になって出てくるわけです。

そうすると結構つらいものがあります。

山本 柴崎先生、来年はお休みですから大丈夫です。その次はまた元気いっばいで。

寺崎 はあ。元気いっばいで。そうですか。いま私はもうちょっとで「そういうときはちょっと、1、2年交代してもらうんですよ」と言おうかと思ったんですけど、でも、元気があるというのはいいことで、がんばってください。

もう一つは、私、最近わかったんですけど、学生はお互いの意見というのをものすごく知りたいんですね。私などが百万言を費やして感動的なことを言ったと思っていても、彼らはテレビの中でキャスターが何か言ってるぐらいにしか思ってないときがあるんです。これは不思議ですよ。質問なんかするとずるいと言うこともあります。テレビは質問しませんからね。

会場 (笑)

寺崎 彼らはそのかわり、私などの言葉には飽きてても、友だちの話は聞いています。ですから、例えば、感想を書かせ、あるいは、プランニングみたいなものを出させる。いま教職課程を終わって、もし小・中学校の教職にいたら、あの「総合的な学習」の指導をあなたたちはやらなくちゃいけない

い。校長がもしプランを出せと言ったら何を出すかと言って、全員に書かせて、220人出させました。その中から選んで5人に発表させたんです。相手は220人ですよ。それを前に1人でしゃべる。ところがそのときだけは、220人が水を打ったように静かなんです。おそらく学生諸君は教員の言葉に飽きている。こっちも感動しなくなってるかもしれないけど、向こうも飽きてるんじゃないでしょうか。よその学科の学生が言ってる言葉はよく聴きますね。学生のあいだのコミュニケーションを横から破っていくような授業スタイルっていうのは、しょっちゅうじゃなくてもいいですがたまにはぱしっと敢行する必要があるのではないのでしょうか。他方、放送大学のように話を聞きたいという学生もやっぱりいるんです。そういう時間は作っておいていい。けれども、学生たちのコミュニケーションの仕方を変えてみる、いわばお互いに関わらないで生きてる学生たちを破るといふことが必要な感じがしますね。これは私は、大人数を毎年持っていて感じたことでございます。ですから、何か発表させたらどうですか。おもしろいことに、マイクを持たせるとしゃべるんですよ。これは不思議なんです。マイクに何か言うと思ってるんですね。そうすると、足が震えましたなんて言ってるけど、結構よくしゃべるのです。

名和 話つきませんが、そろそろ時間ですのでこれくらいにしたいと思います。寺崎先生、嶋田先生どうもありがとうございます。

全学共通カリキュラムの発足から5年を経過した現在において、全カリのあり方や問題点を考えるために、寺崎先生と嶋田先生をお招きしてご報告をしていただきました。われわれのテーマに沿った、たいへん内容の深いご報告や重要な問題提起をしていただいたことに感謝したいと思います。また、多くの教員や職員、学生の方が参加され、予定時間を大幅に超過したにもかかわらず最後まで残っていただきました。司会を担当した私といたしましては、全カリのあり方や運営について多くの教職員が関心をもっていることが分かり、たいへん心強く感じています。最後になりましたが、貴重なご報告をいただいた寺崎先生と嶋田先生にお礼の拍手を送りたいと思います。ありがとうございました。

〈拍手〉

Ⅳ まとめとして

名和 隆央

シンポジウムでの寺崎先生、嶋田先生のご報告は、全カリの経緯や現状を的確にとらえたものであり、そこでの問題提起は、われわれが今後の課題として早急に取り組まなければならないものばかりでした。私の思いつくままに、両先生の指摘された全カリの問題点やこれからの課題について整理しておきたいと思います。

嶋田先生は、明治学院大学の教養教育システムについてのご説明とともに、外から見た全カリの問題点を二点指摘してくださいました。ひとつは総合教育科目の総合化をいかに果たすのかという問題でした。明治学院では教養科目のなかに発展科目を設けることで、カリキュラムの積み上げ方式を行っており、そうすることによって専門学部や学科で目標を見出せない学生に対し副専攻に近い学習の機会を与えているということでした。これもひとつのやり方かもしれませんが、立教では「専門性に立つ教養人」を目指しており、教養科目だけの総合化は、われわれの意図する専門と教養との総合化とは違って来るように思われます。しかし、われわれも教養教育と専門教育との総合化をどのように果たすかの方法は、まだはっきりしているとはい

えません。これからもいっそうの議論が必要とされるところです。

第二の問題点は、全カリという組織の特徴からくることですが、各学部の専門の先生方に教養科目のために来ていただくということで、科目担当の義務化、授業内容のルーチン化・空洞化が生じるのではないかということです。この問題はわれわれもつねに考えており、現実の変化に対応して科目のリニューアルを心がけています。しかし一方では、特定科目が500人以上のいわゆる大人数授業になってしまい、単位制度の空洞化という見過すことのできない深刻な問題が生じているのも事実です。立教では、2003年度からWeb登録科目を設けることで、大人数授業の人数制限を実施することになっています。われわれとしては、学生本人の問題関心に沿った履修を考えてほしいのです。しかし学生の履修行動がどうなるかは、ふたを開けてみないと分かりません。

寺崎先生は全カリ運営センターの初代部長を歴任され、その成立の経緯をもっともよく知っておられるということで報告をお願いしました。総合教育科目部会長を担当している私には、是非ともお聞きしなければならないことがたくさんありましたが、期待にたがわぬたいへん有益な報告であったと思います。

なかでも次の三点は、印象深いものがありました。

まず第一に、全カリのカリキュラムを立ち上げるに当たってどのような理念があったのか、という点です。その当時の議論のなかで、カリキュラムを展開するうえでの四つの柱が出てきたということです。それは、環境、人権、生命、宇宙ということでした。これらがカリキュラム展開のベースにあるということでした。私は人文・自然・社会の旧三分野が解体されて、テーマ別の6カテゴリーに再編成されたことは理解しておりましたが、この四つが柱となってカテゴリー別の科目展開がなされていることは十分理解していませんでした。たしかに環境、人権、生命、宇宙は、現代に生きるわれわれの基礎となる教養であり、これらから離れてはどのような専攻分野も存在意義が危うくなるかもしれません。科目展開に当たって、この四つの理念を忘れないようにしたいと思います。

第二に全カリの運営に関して、各委員の先生方に個別には不満があったかもしれないが、不平を漏らすということはほとんどなかったということです。ほとんど毎週、10時、11時まで全カリをどうするかという議論が続いても、不思議な熱気と連帯感があって、それが全カリを立ち上げる力になったということでした。これは重要なことで、全カリという制度がどのようにして成立したのかを教えられました。だが、われわれにとっての課題は、立ち上げ時期の熱気が冷めつつあるいま、

全学の関心や意欲を全カリの教育にどうやって結集できるのかに移っていると思われます。

第三にこれがもっとも重要な問題ですが、総合教育、教養教育をどうするか、いわゆる総合化をどのように行なうのかということです。いまあらためて問われているのは、教養教育と専門教育との関係をどうするのかという点です。全カリ科目は専門科目と並立しており、それによって「専門性に立つ教養人」を育てることになっています。しかし現実の展開は速く、寺崎先生が指摘されましたように、専門教育では専門的内容が大学院に移っていくという状況が生じています。そうすると学部教育における専門的内容は、経済ではビジネス・スクール、法律ではロー・スクールに移るということで空洞化が進むかもしれません。ですから学部教育と教養教育とをいかに連携させるかが、あらためて重要な検討課題になっているということです。

立教大学では、専門学部の運営と全カリの運営がシステムとして分離されており、残念ながら十分に連携がとれているとはいえません。われわれは全カリのなかで問題点の改革に取り組んでいかなければいけません、やはりそれと同時に、学部教育のあり方とのかかわりのなかで、これからの教養教育の方向性を考えていくべきであると思われます。